



伊地知文庫
文庫20
288
5



清20
288

八雲抄卷第廿四

伊地知氏書冊

言語部

世俗言

此二洞牙入乱後目可書之

由緒言

斷簡言



世俗言



わらへ わらへ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこかしこかしこかしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ かしこ

かしこ

かしこ

ふつふつと
お流る水也
いしつりつて

か
一説うろこは又うろこも多しあり海成まろくの魚よ
なまじりしうろこもなりあり海成の魚乃れきよいな
らうろこもなりあり海成の魚なり

し
おまじりしうろこもなりあり海成の魚なり

し
許容しつてのうろこもなりあり海成の魚なり

し
容れしつてのうろこもなりあり海成の魚なり

し
わき世風流

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

し
うろこもなりあり海成の魚なり

ゆきひふ

倭氏し女は南のひん一はるもつうくちの死乃教まけ

さめく

あまのこゝろくんとて可察ん

せむじ

たけぬる也

さやひ

後捕抄さやひらるといひちりあも是も大略月さやひ也とひやうなる
ふ 在倭氏に風さやひとて五源氏者本又早蕨

いよせもも

いよせもも

わらうま

わらうまは倭氏よ風のい
とわらうまはあまのい

ち

ち

ねむり

ふゆも

まうち

直
ちり也

うま

如羽多妻とてせり うまも
もまもわらうまのうり

あはれ

あ

あ

あ

はらう

わさく

わさくは倭氏よ風のい
わさくは倭氏よ風のい

いよせ

いよせ

名のまかり

いよせ

いよせ

あ

うら

うら

あ

あ

あ

うら

うら

一説女名也荒蕨説よるは是也とてうらとておとせとて

うら

うら

うら

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

そよそよ り急の ありあ うり也 うり也 あめいし あつかり方乃り

よら標後とうきり ねねなまし ねねなまし 方乃り

まのこま まのこま まのこま まのこま

うり 源氏物語の うり うり

まのこま まのこま まのこま

うり うり うり うり

まのこま まのこま まのこま

うり うり うり うり

うり うり うり うり

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

まのこま まのこま まのこま

毛うよふり あついでらる
法補後 いふんがり

わさくら わさくらもる也
わさくら わさくら也

ひら ひら
わら 源氏やいほわら也

あふ あふ
あふ あふ

只の介也 余のうら
せも同なり也

い い
い い

わ わ
わ わ

あ あ
あ あ

あ あ
あ あ

ゆ ゆ
ゆ ゆ

ま ま
ま ま

ま ま
ま ま

あ あ
あ あ

あ あ
あ あ

い い
い い

あ あ
あ あ

あ あ
あ あ

あがきびし 海もあがきびしと云ふは、但狭き浦に、舟を泊る時、

あがきびし あがきびし、月もあがきびし、

うき うき、うき、うき、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

あがきびし あがきびし、あがきびし、

海舟

七

ゆめりくくち

是れはゆめの夢にいつても因りぬれは夢の疾を如
疑ふこそこそこの例のうぬくちよまよひのゆめりく

由緒言

ゆめりくくち 延命也 まゆれれひもそく 人病の

まゆれれ 是れ命の極也但又物とわらんともいふ

あらり 百重のく人ともまらくちのうへはまの

そ 十よわらくちと陸奥のうへて

あ 山藁の根

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

あ 人の云ふ

志行り 山は入るのうららんあつてよ本を抄せよと

見よのまへ 新代よりうらまんとて新代抄と云はれ

えひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あう あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

あひ あつてはるのうらまんとて新代抄と云はれ

いれりちりしを 林岫の怪く照見 物のこまれうら

わうらひく 方十二のわひくうらうらこのことありきわらうらうら

とのわら 八十人せよ落つの人せ而遊目き後すあり

不可別 危きものちりやうこ 危きものちりやうこ

まのまわ 志ま也と云ふこ海氏把波玄符徳内約よのこまてくうらまわ

は約ありはまこあう かのまこことんた

二鼠競走度目之も且飛定蛇争侵而之隙之約夕走 志まきまのまらうら

はまのゆきま 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

まのまわ 志ま絶文と世間のまきまのまらうら

あつらひのり 是れあまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

後撰抄 あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

あまのり あまのり 是れあまのり あまのり 是れあまのり あまのり

つたをどきりらん...
りやんねんらん...
りやんねんらん...
りやんねんらん...

新簡言

一 天地乃とそよ久のひは巻とこらん...
しとそはとれ功留居の新羅志とらん...
石と御蒙乃らん...
誕生わらん...
但ひの神のらん...
前玉地土部深の村子負厚...
長一尺二寸六分圍一尺八寸六分...
長一尺一寸圍一尺八寸...
好のふつ勝海...
歌平表之石...
古老傳曰息長足...
一とそはとれ...
らん...
てらん...
多産とらん...
乃格あり...
切らん...
らん...

花乃うかあともよあまきし回あつて一かふあふ
 どりまあつて不并但その花をこあつてうらうらま花を也
 一これそのらむいもともりう記ま乃のいしうの葉よあ
 けらりせらといふものらむいもともんたりといつら也之記
 らささあはらひたしうつんといふんまう也之記らさ
 ち之枝とうらりゆうけくききり三枝を枝の本乃
 葉ありながむもいりて花のいしきもこころうら
 せしりしうの葉あつてけいむあつてうら

一ちりまはの小うらまよまぬもそをいしは葉を
 ぶとわさびくちらまは乃母りよまぬといつら
 法花經涌およよ不深を間法如蓮花をあるとい
 子んせういしまぬもいけらまはあのみよい
 おうらあよままらんぬもあつてさあふんせく
 なこら葉もむとわさびくとつまらわさびくと
 ちくわひまらんあつて乃人のわさびくといつ
 んうらわらう次

一さちるなまはらあつて神をわらああつてくうら
 あいのちうらあつて日本紀云天照太神は孫を孫
 命をわらうらあつていしあつてとせんとはあつ
 よはま多よ葉火うらあつて神をうらひ蠅神多己上
 あつて人をあつて人の乱るあつてふた神乃わら也
 ちうらあつてめむとく六月あつてるなりけんあつて雷

とつちひらうりやさうんかまらまふこしくを
 抱ふうらうゆふよ八十徳神をばとへて問てのこまを
 くちうひまのめんよとまうよらん歌をいやう神こ
 りおつくま路をばやうく天龍見聞是神乃傑あり
 葦原中必をいとの根のりともれうれともれうく抱い
 ぬれとも標火くくまといひをのひあ月蠅く

一 わさう山うきさうへゆる為ま乃のわきれんどうら
 行もくあく万葉中十六云葛城王遣う陸奥必之
 討必日波永緩怠異志於河王と不悦怒色歌而陸
 彼飲饌不肯宴樂於是も前采女風流娘子在と推
 觴在と持多撃之と勝而詠けあ余乃まことと酒悦樂

飲後月云いあ遺在万葉末不注之葛城王と後如姓在
 大后播徳兄是あり

一 ち海うらうりのよよこもるともまどくせんと思ふ
 家あうおくよいあわくくえあさし不さぬも
 わりぬへ一古今よも懸るれあされとも伴勢うむを
 うらふくこのうらよよあもらんといつるふお院大徳こ
 そひを海うらのうらひあありとととらありとよ
 めるありせめくともらありとととらありととら
 せのらありよ若野山乃わらふわらひくせめその
 めよといつるあり遊年通具なともとらありととら若野
 とよある如ゆまおもわくくえておゆく録之

けり細後頼朝よいなり昔人の親子と二人をりり
 ねやうせく々か後慈うあむの年とあまよまよ
 せうくうあひひくくせうり人としはうまをさあ
 くれと慈くさひよ兄弟うらうてはつらわや
 よゆさむうひはげ海をあうてはうあまわらうま
 ともさけさうまきうむ親あよんむうのいんを
 うふひはげ海うらう年はむわさくねや
 ぐまはうくさうくさうりうまをくく親のま
 まそく慈ひくさわううあくく思ひあひさく
 きなうもあくくんううくあまく人のねひ
 とさくまひくくうまひくく慈あまひくくはの
 おりよういん後おははひのあまきく何乃うう系
 ぶくうひくくあまひくくうらうらぶあてくせまの
 こたりようりあのれくくうくくあひくくねと
 慈やふくさうくく目もさくくあやまひくく
 うまひくくあまひくくうくくは慈うくくうまひ
 くくくくくくくくあて目と毎てくわりくくく
 ては乃乃はよく慈くくあさくこの親乃くくあ
 海りの鬼也慈くくくくくあうあまひくくあ
 ひくく慈くくをきれあうくくさりくれも慈乃ねや
 考あらうの年月くくくくくあらうあわあめ
 しなれあくく慈くあくくくくくあひくくく

世類よふせつるとそらつら中々事とよこばり殿
せつとそらつらるるそ世之く土左日記よりこ切事う山む
つとや山さ紀ありらるとそらよもやあふんたりと思
毎にわえれせとらりきるふらゆら連坊ぬ又く御つと
らふせつといふこといせつとらるる乃世の風俗あり一説
よふこかりく御るさわ乃中山といひり

一家う慈らちひのさ乃石とあくらららひのよ徳てきり
乃のの御やちひのさ乃石と千人一と引衣ありか
なららりち七たららとせそれとくひようきとらるるよ
い流ともあく物んとまらせうと乃のあや一と社之流
伏とららりい流ともあくあや一とららら一と因縁あり

細説不能動之

一 ぬかちこちわま乃うらうとあうら後めこそうと
それよちせよ 詞まられはさこわいあると一と
いりあの奥よわり

一 むけさこひとら乃らめふく一とそわひ志あえ
ら年とくめらとわひ一あみくらととと六年乃ら
めよちとて一美人よりあうとわひ思てよらとひ
とあ一といふあり年とくめとら六年ら入めとい
ゆ也是ら花葱説也

一 みる雪乃みの志流新うらみはけい喜とらんからせとれ
とらうとせぬる是正月朔日雪降るるふたねうらと

と云く般約くある事ありし一乃其を言乃方
よふ人母之乃くあるよふらと云ふ也さう母喜子ゆ
而或説よま中説く誠叶何れも必不之信之
依只自然の死孝武帝崩又年正月朔日雲霞月以夜
日養蔡衣と云く言さう言く六む乃く此を折て
瑞と云帝をさう言ひ終之衣と云く言さういり

一難波く志介さう言く山乃く出る月さ今さ
くさ月乃望と云く言さう言く志介も十八日よ
く山也なりさう九抱朴子曰月之精生乃是月盤
而清濁大生是と云く言さう言く志介よ志介さう言く山を
月もさ山ゆふさる系氣よさむ下い流連もさ遠

一ぬ乃めいぬさ人なす月終よ不さ勢をぬ
てぬ命と云く言さう言く物終乃中二よわりをふな
るさう言く言ぬ縁よわり言貞婦ありさま
さたさう言ひてさびくゆく故女たさる死まさく武
昌乃お山ありさう言さう言く志介も志介さう言く
まう言く言ありぬ妻をさう言く死ぬ屋をさ
なりよさう言さう言く人乃ぬてさう言く言さう言く
山さう言さう言く言さう言く言さう言く言さう言く
隆と云説付一極也地説も無強お遠死

一少の年もさう言く言さう言く言さう言く言さう言く
とよさう言さう言く言さう言く言さう言く言さう言く

温者不見と云うもわり又騰雲如涌煙密く如
霞練といふもさるぬの似系りあるべし

一情あつたせとけりくらわたり乃海に山ちをて
む物もさるぬみくひえの山よりのまじく
人さるなりわのまじくいんといひたりまじく
くもる也うらやまのわのまじく思はくまじ
し勝也持物志といふ書よま書強る均といふ
人等とて山とあえ一人を別り一人の影一人の光を
無るまの酒とのまじくもまのまじくひたりまじ
死らねもさるぬ思はくまじくまじく
けり也と人説あり但普通よま難ん治れ

一わさ目くまの海會りよよてる月乃わつさるまを
山くよままのまじく朝日のまじくまの月乃
酒乃山母あつたわつと思はよませそまあり山
あつたまのまじく也中ぬらつとつまの月乃
映しあると人いふまのまじく目乃山は映し
ふあり元日月まじく紀元一云修弊治修弊冊二
生目非はま光るまのまじくまのまじく
まじく天地わひまのまじくまのまじく
まじくまのまじくわあまのまじくまのまじく
まじくまのまじく月非まのまじくまのまじく
まじくまのまじくまのまじく二非わあまのまじく

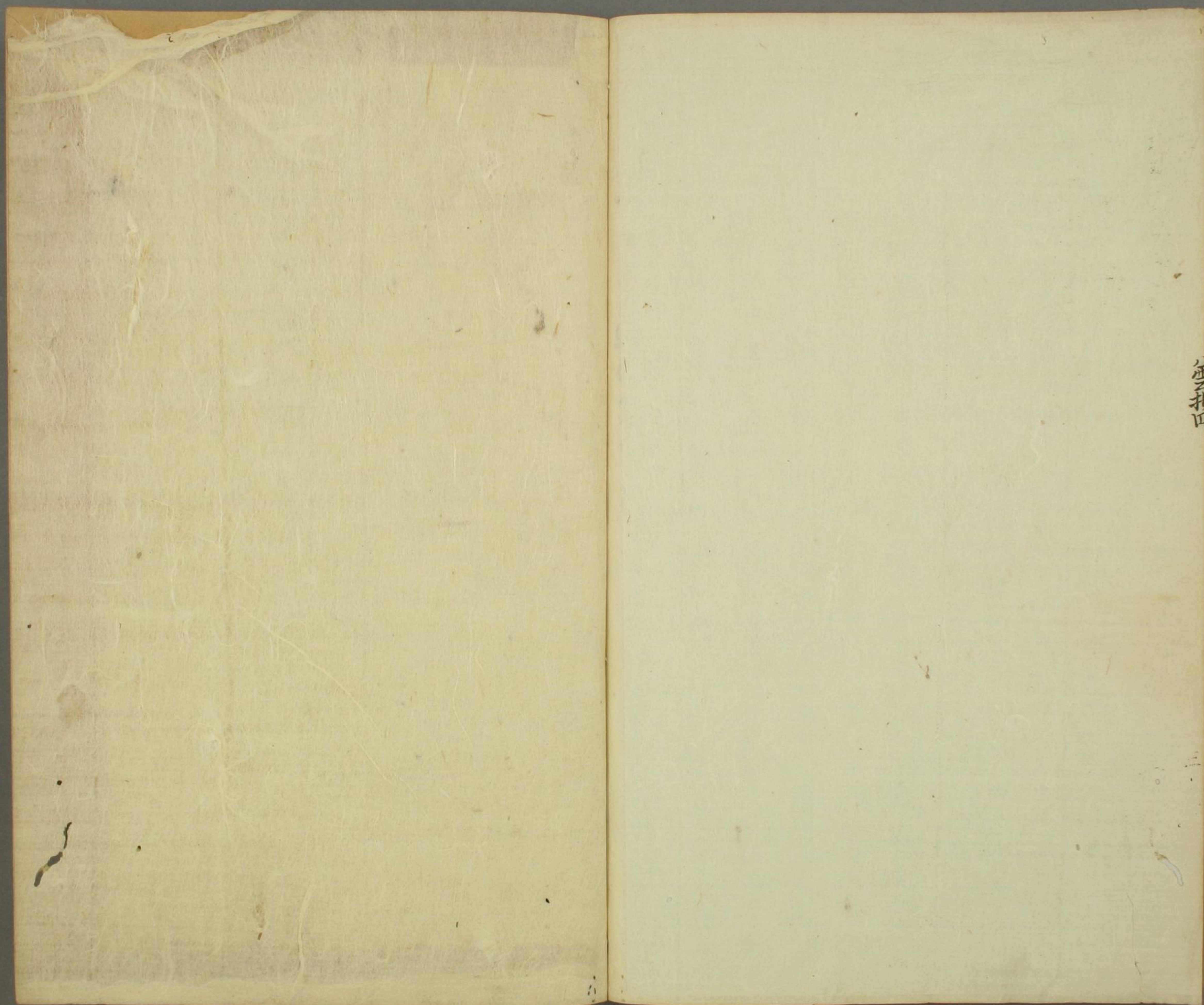
む珠子うまんとあひたるまどをて海にうへにうらるる
始別北お神是日神と云又右のまふまはかきとせり
也此の神を月神といふ月神月といふ神也

一 海まはらむとむしころもころのわまははらむ自らも
まらつあましと思ふむしとほれおる海也と云
とらし珠を海にたのむしと云まらつあましと云人
也わまははらむと云ははらむのわも也日のうらるる
也一まらつあましと云まらつあまし

一 月まはらむと云ははらむのまらつあましと云
くそららるる夕まはらむ^夕まらつあましと云
夕夕陽映川ありと云とらつあましと云ははらむの
まらつあましと云とらつあましと云ははらむの

一 松のこよ月まらむと云ははらむのまらつあましと云
ぬまははらむと云ははらむのまらつあましと云
と云松乃葉まらむと云ははらむのまらつあましと云
又木のこららるる透らるるまらつあましと云
一 林まらむと云ははらむのまらつあましと云

うりそ是を母のうらるるまらつあましと云ははらむの
うよららるる海まらむ也と云九月のうらるるまらつあまし
初く死動名菟ま月申ま河川上よる桂まらむと云
あまらつあましと云ははらむのまらつあましと云
十六仙まらむと云ははらむのまらつあましと云



百廿四

